全国自治研センター･研究所交流会へ参加して

小規模自治体と実践的住民自治
その知恵と行動に学ぶ

上窪 浩之

0番ホームから栄村まで

朝の京都駅は、ホームに電車が到着するごとに掃き出されるように目的地へ急ぐ通勤・通学客で混雑していた。賑わいを見せる中央改札口であるが、正面にある「0 番ホーム」に向かう客は少ない。その昔、ここは1番ホームであった。全長556m、日本一長いプラットホームだ。北陸方面へ行く特急や、北海道・東北方面に向かう「トワイライトエクスプレス」「日本海」、そして東京行「銀河」などの特急が停まる。在来線のホームに急ぐ人々を尻目に、里帰りの人が列を作るなど、郷愁を誘うプラットホームだ。

2008年3月28日（金）早朝、私は長野県栄村での研修会に参加するため、0 番ホームに向かった。一緒に参加する京都地方自治総合研究所専務理事の谷口富士夫さんと事務長の黒岩洋子さんは、既にホームで待っていてくれた。待つこと数分、滑り込むように7時38分発富山行「特急サンダーバード1号」が入ってきた。途中2駅停車し金沢に到着する。金沢から「特急はくたか9号」に乗り継ぎ越後湯沢に向かう。出発してすぐ車内販売で駅弁を買う。ＪＲ北陸線の車内販売では、富山の「ますのすし」と加賀・金沢の「かにすし」が楽しみであるが、迷ったあげく「かにすし」に決める。車窓の左に日本海、右に残雪のアルプスの山々を見ながら、ここで駅弁を広げた。日本海産の紅ずわいがにに甘味の強い酢を加賀コシヒカリとあわせた贅沢な味わいである。しかも車窓は絶景、魅力的な美女が隣席なら気分も最高なのだが、隣ではサラリーマン風の男性が「ますのすし」をヘラで切っていた。駅弁を見比べながら「この人もそう思ってるのだろうな」など考えていると、後方の黒岩さんから「ますのすし」をいただく。やがて列車は北陸本線と別れ、直江津から信越本線と合流し、北越急行ほくほく線へ入る。いくつかのトンネルを抜けると十日町に出た。十日町駅は飯山線の駅でもあり、ここから南へ各駅停車で8駅行くと目的地の長野県栄村・森宮野原駅に抜けられるが、乗り継ぎ出来ないなど不便である。十日町駅を過ぎると、高架になった軌道は大きく右にカーブし長いトンネルに入る。トンネルを抜けると、急に雪深くなり一面雪景色となった。六日町である。ここで列車は上越線に入る。いくつかの聞いたことのあるスキー場などの看板を見ながら、定刻の12時53分終点の越後湯沢駅に到着した。

越後湯沢駅から会場の栄村文化会館へは送迎バスが準備されていた。先発のバスが約10分前に出発しているので、後発のバスに乗車する予定でいた。ところが、バスで会場までは約1時間半かかるらしい。しかも後発のバスまで50分待ちである。確か開会時間は午後1時30分、村長の講演は午後2時と聞いている。せっかく遠い所まで来て村長の話を聞き逃してはと

栄村役場庁舎に併設した文化会館

全国から参加者で満員の会場

タクシーに乗車した。タクシーの乗務員にそのことを告げると、バスルートとは違う近道を急いでくれた。千曲川沿いを走り、会場の栄村文化会館に到着したのは約 50 分後の午後 1 時 50 分だった。文化会館は役場庁舎に併設されていた。「間に合った」と急いで入ると空席がかなり目立った。開会は午後 2 時 30 分であった。

伝説の 村長と の 出会い

全国自治研センター・研究所交流会実行委員会、長野県地方自治研究センター、自治労長野県本部が主催する、「全国自治研センター・研究所交流会」が、2008 年 3 月 28 日（金）から 30 日までの 3 日間、長野県・栄村で開催された。栄村は、長野県最北端にあり新潟県津南町と接し、面積 271 平方キロ、林野率 92.8 %、世界最高の豪雪地帯である。世帯数 889 世帯、人口 2515 人、高齢化率は 42 %に達する。平成合併政策ではあえて自立の道を選択した。

会場となった文化会館の舞台では、オープニングセレモニーの「栄ふるさと太鼓」の演技が始まった。女子小中高校生の皆さんの、素晴らしい演技と迫力ある鼓動に拍手を送った。開会式では、主催者挨拶と地元栄村議会議長の歓迎挨拶があり、午後 3 時半過ぎ、いよいよ栄村村長・高橋彦芳氏の登壇となる。

私の中では、村長はかなりティーアップされていて、「伝説の村長」とはどんな人かと固唾を呑んで舞台の袖を見つめた。すでに満員となった会場の視線を一点に集め、いよいよ村長の登場となる。舞台中央で一礼されたあと舞台端の演壇に移り、「小規模自治体と実践的住民自治」と題して基調講演が始まった。村長はごく普通の田舎のおじいさんという印象だった。しかし今年 80 歳を迎えられる「おじいさん」は、31 年間の行政経験と 5 期 20 年間も村長を務め、実に人生の大半の半世紀を栄村のために、村民の目線で村民への奉仕をされてこられた。その言葉の一つひとつには重みを感じるものがあり、しっかりと聴き入った。以下、「実践的住民自治」の村長の講演内容を要約した。

近代化と 人間疎外の 克服

村長は、昭和 30 年、中央大学法学部を卒業後村の職員となり、15 年間は村の社会教育を進める公民館主事の職にあった。世の中を変えていくのは公民館の仕事と、最初にしたのは公民館結婚式だった。伝統的な権威に抵抗して民衆の側から民主化を進めていく近代化など、住民の暮らしのなかの諸問題にかかわりつつ、実践的に学ぶ道をたえず模索してきたと言う。昭和 35 年には国民所得倍増計画が発表され、翌年には農業基本法が制定された。すでに経済の成長が始まっていて、農工間の格差が広がっていた。昭和 37 年、栄村農民組合を設立し外からの合理化、近代化に対して闘い、内側からの近代化要求を掲げて闘わなければならなかった。公民館は実践運動の主体になることはないが、住民運動の高まりのなかで積極的に支援する考

えでいたという。1960 年代にアメリカで生まれ日本に入ってきた近代化理論は、前近代的な農業社会から離陸して資本制工業社会へ進むことで、人類はパラダイスに辿り着けるというものであった。スクラップ・アンド・ビルドの論理で経済的近代化政策そのものであった。そこにあるのは資本のための経済であって、人間はいない。栄村では貨物駅が廃止され、農業では暮らせなくなり、出稼ぎに頼らざるを得なくなった。15 年間の社会教育活動を終え、企画課長に就任した昭和 52 年頃には、高齢化が進み、栄村のような豪雪地帯では屋根雪の除雪作業が困難を極め、対策が急がれた。高齢者世帯を直接支援する仕組みを作らなければと、降雪を雪害とみなし県に支援を得るため強く要請した。こうして「栄村雪害対策救助員設置要綱」が公布、即実施された。住民がぎりぎりの状態にあるときに、どう手を差し延べるかが問題であるが、その解決の担い手は当然に自治体にあると考えてきたという。

1960 年代から急激に押し進められた経済の高度成長政策は、農業と村の仕組みが崩れ、中学校、高等学校の新卒者は、ふるさとを後にして都会へ出て行くのがあたりまえのようになり、親たちも不本意ながら、農林業の未来を諦めているようであった。70 年代に入り、若者の転出だけではなく、一家挙げて離村するようになり、71 年と 74 年に、栄村では集落が一つずつ消えた。農山村の自然、優しくて豊かな心情、人間と自然の営みによる生産物、すべての価値が否定され、住民の心に忍び込んでいく様を見て「人間疎外」を感じたと言う。そんな村の企画課長という職にあって、広がっていく「疎外」現象に手を焼いた。地域づくりとか、村づくりといっても担い手が地域に立脚していなければどうにもならない。地域の住民どおしでは不可能なことであった。

「疎外」、これを克服するには人間と人間の結びつきを回復する以外にない。

村長として最後の講演

わが村の住民がテレビで見ている東京の過密都市の住民との出会いをイメージしてみたという。過疎と過密の現象は全く正反対であるが、経済の高度成長が生み出した双方の住民が交えて話し合うことにより、何かが見えてくると考えたという。消えた集落の家の中に入ったとき、過疎に悩むわが村の住民と過密に悩む都市の住民が出会うことによって、双方が疎外感から脱出できるというイメージが湧いたという。昭和 58 年、この家を人間復興の「ふるさとの家」と命名して、村と都市の住民交流の場に無料開放することに企画課長専決で決めてしまった。この企画がニュースで流れ、大ヒットした。一般事務にも支障がで、村長が「誰がこんなことをしたのか」と大声をあげたりしたという。囲炉裏を囲んで田舎と都会の親たちが子どもの教育談義に熱中したり、都会の小学生に伝統芸能を教えたり、自分の技で喜ぶものを作ってやったりと、すべてに控え目な村の父さんらが自信を持っていきいきしはじめた。感謝の手紙に感動した。みんな本当に喜々とした。生活の足しにはならないけれど、心の肥やしにはなった。こうして全国的に脚光を浴びた「ふるさとの家」は、わが村の住民の誇りを取り戻し、「疎外」克服という目標に希望が膨らんだという。

ゆっくり人生を楽しめる地域づくりをめざして温泉調査も精力的に進め、5 本の成功を収めた。これらの施設を束ねて、交流を進める核として公益法人設立に動き、財団法人栄村振興公社が発足した。これにより、住民がふるさとに生

きる誇りと自信を持つようになり、都市との交流が拡大、公社の業績も上がっていったと振り返る。昭和 61 年、職員としての任期を終える。

実践的住民自治

昭和 62 年冬、次期村長選挙に立候補の要請があり、昭和 63 年、村政に臨む 5 つの抱負を述べて決意する。選挙戦の相手は、実績を上げて評判の良かった前村長の後継者を名乗った元議会副議長であった。国や県とパイプを持っているかどうかが値打ちとされていたが、今までのように代議士にお願いして補助金をもらうような行政ではだめだと感じていたという。大方の予想がはずれて辛勝した。選挙後、勝ち組と負け組がでるが、立候補の際、村政抱負であらかじめ表明した通り、すべての住民に同じように対応することをまず心に誓ったという。そうでないと村の力が半減するとのことであった。

「実践的住民自治」を振りかざして当選したので、住民の知恵と技を信じてやった。せめて村の固有事務は、自分で好きなようにやる。補助金をもらわない。執行過程に住民の直接参加を求めていくことを表明した。いわゆる「実践的住民自治」である。

「あんたとこは、自治体が小さいからできる」とよく言われるが、都市でも都市の中の小さい所を組んでできるという。

村長就任と同時に、財団法人栄村振興公社理事長の職も引き継ぎ、魂を入れていく立場になった。初年度の利用者は 2 万人、5500 万円の売り上げだった。5 年後の平成 2 年は利用者 5 万 5000 人、売り上げ額 1 億 5700 万円、10 年後の平成 7 年は利用者 8 万 4000 人、売上額 2 億 3000 万円と順調に推移してきた。村の観光施設は、初め平家の落人の谷といわれてきた秋山郷だけだったが、農林業と結ぶ交流型の観光に発展させるため、簡素な宿泊付温泉施設を村内にバランスよく 4 か所に増やし、最近の利用者は約 16 万人になった。公社の売り上げは年間 3 億円をキープしている。しかし、経営収支はほぼトントンだという。議会などからは、もっと効率化して償却引当金を積み立てるべきではないかという議論もでるが、公社は都市との交流や観光事業を通して、地域の商業、農業と組んで地域経済の活性化を図る役割を担うことを目標にしている。公社はどこへどういう支出をしたかが重要であるという。

平成元年、最初の単独事業として農民主動の「田直し」が始まった。昔はわずかな暇を見て自分の田圃を広げたり、格好よくした。この辺では「田直し」と呼んでいた。「田直し」事業は、圃場整備は金がかかるから自前でやるというもので、農家負担を軽減するため 10 アール当たり 40 万円を目途に、農家と村が半分づつ負担する村独自の小規模基盤整備事業である。普通は 150 万円、国の補助事業でも 2 分の 1 の 75 万円も出さないといけない。設計はしない。農家と役場、青年オペレーターの 3 者が現場で青空設計するという設計図なしの公共事業で、出来てから設計し、出来高設計は村がした。80 %の農家が参加した。普通は圃場整備して終わりだが、機械の共同化をした。1403 枚の田圃が 506 枚に整備されることになる。

平成 4 年には「道直し」事業がスタートする。高齢化が進みカンジキで雪踏みができない家が増え、集落内の交通に支障がでた。この事業は、集落の道を機械除雪できるよう最低 3.5 m以上の幅員とし、用地調達と路線は集落が決め、決めれば村が入る。集落で路盤が大丈夫と言えば路盤改良はせず、1 ㎡ 8000 円でできた。地域の実情に沿った独自のやり方に補助金の交付を認めないのでは、わが国の真の公共事業は育たない。「自分たちでやればできるものである」と熱弁された。

介護保険の始まる前年の平成 11 年、山里に点在する集落で、31 集落の有資格者の住民ヘルパーが社協に登録し 8 地区に分け、24 時間

の介護を実現させる。いわゆる「げたばきヘルパー」である。隣近所なら下駄を履いて真夜中でも雪の中でも駆けつけられるということから名付けられた。

栄村は、日本でも有数の豪雪地で、昭和 20 年 2 月 12 日には、ＪＲ森宮野原駅構内で、7ｍ 85 ｃｍの積雪を観測し、同駅に「日本最高積雪記録」として積雪標柱が建てられている。こうした背景から村独自の雪害対策事業を実施している。昭和 52 年から雪害対策救助員を設け、15 名を 5 班編成し、冬の期間だけ採用する非常勤特別職員として日額 1 万 3000 円で委嘱している。等価交換ではなく不等価交換の社会保障であり、雪下ろしなど安心して依頼できるシステムという。また、自力では自宅から除雪路線までの道踏みが困難な世帯に対し、平成 12 年度から村が無料で道踏みを支援している。

村内のバス路線は村の負担が増え運行維持が困難になりつつあった。そこで村営バスを廃止し、経費が安く効率の良い、乗合方式の戸口から戸口まで送迎するデマンド交通システム「かたくり号」を平成 19 年度から導入する。予約による運行で、一律 300 円で自宅玄関から目的地まで利用できる。

村長は、「村の中をやってみて、行政を体験してみて、外へものを言う。ただ村の中で実践的住民自治をやって終わりではない。こういうことをやれば、誰に権利と利益というものが帰属しているのかを見極める力を持たないといけない」と力説された。

小さくても輝く自治体

平成 13 年 6 月、小泉内閣の経済財政諮問会議の「経済財政・構造改革基本方針」いわゆる骨太方針が出され、市町村合併は自主から強制へと変わった。さらに拍車をかけたのが、平成 14 年 11 月地方制度調査会に提出された、いわゆる「西尾私案」である。この西尾私案により、

JR 森宮駅に達つ日本最高積雪記録 7ｍ 85㎝ の標柱

小規模自治体などは衝撃を受け合併へと雪崩現象が起きた。こんな一方的な、しかも一政府調査会委員の私案に揺れなければならないのか。小規模自治体の未来について明るく話し合う場を持とうと、高橋村長らの呼びかけで平成 15 年、「小さくても輝く自治体フォーラム」が栄村で開催される。150 人程度の参加者を予定していたが、参加申し込みが殺到し 3 百数十人もお断りした。最終的には、全国から 46 首長と 120 の町村から議会議員など 620 人が参加した。シンポジウムはやってそれで終わりではいけない、お互いに交流し中味のあるものにしようと以後年 2 回開催された。この小さくても輝く自治体運動は全国に波及した。

村は集会やアンケートなどを積み重ね、平成 16 年、臨時村議会で自立を決定した。この年役場新庁舎が完成し、平成 18 年には村制 50 周年を迎えた。

平成 19 年暮れ、20 年にわたり民主村制を築いた高橋村長が引退を表明した。

雪深き 栄村長 勇退す

現役最後の講演を間近で聞かせていただく機会に恵まれ、とても幸運に思う。講演を終え、花束を受け取られる「ごく普通の田舎のおじいさん」だったはずの村長の姿が、オーラでものすごく大きく輝いて見えた。

シンポジウム
「信越国境･豪雪地帯に生きる」

村長の講演の後、「信越国境・豪雪地帯に生きる」をテーマにシンポジウムが行われた。パネラーは、(財)地方自治研究所長の辻山氏がコーディネーター、地元栄村からエノキ茸生産農業経営の男性と介護ヘルパーの女性の2人、お隣の新潟県津南町から津南町長と、ユリ7万本と水稲4町3反の農業経営の男性と町内で百貨店経営の女性の2人。村長がコメンテーターとして参加した。

エノキ茸生産の男性は、「23 年前に村を離れ、Uターンしエノキ茸をした。ところが大企業が目をつけ追い込まれる。そこで集落営農のはしりを行う。いずれは法人化し若者の働き場所を提供したい」と語る。ユリ生産の男性は、「一昨年豪雪でハウスが壊滅状態になり、丈夫なドームハウスを建設。そのおかげで出稼ぎに行かなくて済んだ。ユリは『雪美人』ブランドとして日本農業賞大賞を受賞した。ライスセンター、ユリとも共同で行っている。米は魚沼米です」と話した。また、百貨店経営の女性は、「高校卒業後都会へ出た。実家が店をしていたので店をしている人とは結婚したくないとサラリーマンと結婚したが、転勤や早朝から深夜まで帰宅しない。私にとって都会は住みにくい所だった。そして地元に戻った。商店街の奥さんは1日中店番で外に出る機会がない。そこで『おかみさんの会』(65 人)を結成した。『商店街が元気ないよねえー』から、どうすれば元気になるかを考え、明るく華やかにをモットーに活動している」と報告された。

1 日目の研修会が終わり、直ちに「さかえ倶楽部スキー場レストラン」へ移動し夕食交流会が始まった。全国から集った参加者の皆さんと自己紹介などをし、和やかな雰囲気の中で交流が図られた。

その後、宿舎となる「中条温泉トマトの国」へ向かった。こじんまりした施設で清潔に保たれていた。温泉に浸かり、ベッドに入るとぐっすり眠った。

日本の農山村 ― 現状と課題

2 日目、再び文化会館へ。明治大学小田切教授を講師に招き、「日本の農山村 ― 現状と課題」と題して講演が行われた。農山村は 2010 年問題があり、大きな転換期を迎えるだろうと言う。2010 年は過疎法が失効し、中山間地域等直接支払制度の終了、新々特例法登場の可能性を残すものの、新合併特例法が失効し、さらには昭和ヒトケタ世代全体が後期高齢者化となる。一方、国民の農山村支援の動きもある。援農 NPO や学生ボランティアなどがそれである。「昔学生運動、今援農運動」と、学生たちは今「何かをしたい」という思いを持っている。

農山村は新たな局面を迎え、4 つの新展開がある。1 つは、空洞化の進行と拡がりである。地域に誇りを持てない「誇りの空洞化」で、空洞化は都市の賑わいのない地方中小都市まで拡大している。2 つめは、限界集落問題である。「限界集落」をめぐってはいろいろ議論もある。言葉をめぐっては、「小規模高齢化集落」や「生涯現役集落」「水源の里」という所もある。また、定義をめぐっては、「65 歳以上の高齢者が集落人口の半数を超え、冠婚葬祭をはじめ田役、道役などの社会的共同生活の維持が困難に置かれている集落」とする考えがある。「消滅」「限界化」という衝撃的な表現が論議を生み出しやすい傾向にある。3 つめは、農家世帯所得の減少。そして 4 つめが、市町村合併の進展と影響である。合併ターゲットである「人口 1 万人未満」自治体の 85 %は過疎、山村等の条件不利地域である。

次に、農山村再生の課題として、5 つの論点について述べられた。1 つは、コミュニティの構築。2 つめは、地域産業の構築。3 つめは、地方中小都市の地域拠点としての再生。4 つめは、地域の取り組みの体系化。思いつき、語呂合わせやマスタープランから脱却し、地域とし

ての戦略が必要。まさに栄村の「実践的住民自治」は、そのものだと思う。そして最後の５つめは、農山村振興の理念の再構築だと言う。

多くの資料やデータなどを準備いただき、より専門的で大学の講義を受講しているような充実した内容であった。

村内視察、秋山郷へ

講演会の後、村内施設を見学する。文化会館・村役場からすぐの JR 森宮野原駅には、昭和 20 年 2 月に駅構内で観測した日本最高積雪記録である 7ｍ85 ｃｍの積雪標柱が建っていた。駅からバスで数分の所に「さかえ倶楽部スキー場」があり、隣接して「山路智恵絵手紙美術館」がある。21 世紀への絵手紙展に寄せられた 63 万通を超える絵手紙を次世代に遺すために建てられた栄村国際絵手紙タイムカプセル館で、現在の収蔵枚数は 100 万通を超えている。

午後から秋山郷へ移動する。送迎も含め移動は全て栄村振興公社のバスが準備され、役場の課長さんも同乗しガイドをしていただいた。雪深い山道にさしかかったとき、「早春の雪の中で、ふきのとうは、花茎を土中から伸ばしている」とのお話に感動した。バスは、渓谷の断崖絶壁を切ったような狭い道を縫うように走る。しかも除雪対策のためガードレールが無く、路肩の所々に赤い布の付いた竹がさしてあるだけだ。役場から秋山郷へは約 30 ｋｍの道のりで、役場の職員がここから通勤していると聞き驚いた。平坦の 30 ｋｍではなくこの道を通うのである。冬は大変だろう。

1 時間以上かけ秋山郷に到着した。木造の新しい建物があり、ここには役場支所、簡易郵便局、診療所、民族資料室、保育園などが入っている。3 階の大広間で、住民交流会が行われた。

江戸時代秋田からやってきたマタギの子孫である、今年 81 歳になる福原直市氏が、「秋山郷の自然と暮らし」と題してお話された。若い頃、

スキー場に隣接した山路智恵子絵手紙美術館

秋山郷で住民交流会

生活が非常に苦しい時代、狩猟で生きてきた。このあたりは、木工業、狩猟での肉や毛皮で生計をたてていた。カモシカとクマしかいなかった。今はイノシシもいる。農業は機械なしの焼畑農業である。周りを苗場山、鳥甲山、佐武流山など 2000 ｍ級の山に囲まれ、太陽の恵みが乏しく、夏でも寒く冬は作物が採れない。昔、餓死したという土地柄だそうだ。学校へ行くより、働いて食うものをとるのが一人前とされた。正月の元旦だけ白いご飯が食べられる。いつもは粟や雑穀米を食べる。昔は、長男長女は村から出さなかった。出すと帰って来ないから。今は、借金してでも高校へ出すと言う。所々、方言がわからなかったが、その熱い語りに、雪深い山里の厳しい暮らしぶりが想像できた。その後、地元の夫婦で作り上げたという民族資料館を見学した。

バスは再び山道を走り、雑魚川と中津川の合流点にある秋山郷の奥座敷、秘湯「切明温泉雄川閣」へ。ここが今夜の宿である。古びた温泉宿ではあるが、学生の時に泊まった北海道礼文

島のユースのような雰囲気で懐かしさを感じた。眼下を流れる中津川の川原を掘ると温泉が湧き出す。銀世界の中で湯治気分を満喫しようと、早速風呂に行き、長靴を履いて雪道を降りる。途中、裸のまま滑って転び、谷口さんに「どっちが頭かお尻かわからん」と失笑されたが、参加した人たちと露天風呂で心を開き、語り合うことができた。夜の交流会では、福原氏らが民謡や尺八などを披露されるなどして、地元に伝わる話なども聞くことができた。

3 日目の朝、9 時に宿を出発し、バスで越後湯沢駅に向かう。一番前の席が空席となっていたので座る。途中後ろを振り返ると、ほとんどの方が研修疲れでぐっすり眠られていたが、「もう、一生来ることはないだろう」と、雪深いの栄村の風景をしっかり目に焼き付けておいた。やがてバスは、山道を抜け、出発から 2 時間後の午前 11 時、スキー場に高層ホテルなどが立ち並び、スキーや観光リゾート地の玄関口として賑わいを見せる越後湯沢駅に到着した。送迎バスを運行いただいた公社の職員にお礼を述べ研修を終えた。

おわりに

今回の研究集会では、栄村の独自で多彩な「実践的住民自治」の取り組みを中心にその知恵や行動を学んだ。村は住民と協力して「田直し」や「道直し」など、国の補助金に頼らない「身の丈」に合った施策に知恵を絞ってきた。そこには助け合いの精神があり、心の豊かさを感じる。「小さくても輝く自治体」運動は、小さいながらも、したたかに生きる村の姿を見ることができた。

私のまち笠置町はこれから正念場を迎える。人口は 1850 人と京都府で最も少なく、財政力指数が府内で最も悪い。平成 18 年度決算で、一般財源に占める人件費や扶助費の割合（経常収支比率）が、全国ワースト 2 の 123.2 %にのぼる。マスコミなどが「第 2 の夕張」と取り上げるぐらい危機的状況下にある。かつて 70 人いた職員数は 40 人となり、しわ寄せがきた課では、1 人で何役もこなさなければならない状況にある。また、給与水準はラスパイレス指数 84.2 と断トツの府内最低にあるなど、決して行革努力を怠ってきた訳ではない。（一方、議会議員の報酬が引き上げられるなど、呆れ果てた現象も起こってはいるが……）。

当町は、栄村のように自ら自立の道を選択したわけでない。明治 22 年の合併以来 119 年間合併はなく、昭和、平成の大合併にも取り残された。昨年、近隣の 3 町は合併し木津川市が誕生したが、望んでも加えてもらえなかった。

自立の道を選んだ栄村とて、高齢化や人口減少が進み、財政も厳しさを増すなど、取り巻く状況は楽観できない。国の構造改革による政策は、笠置町や栄村など全国の人口 1 万人未満の小規模町村を淘汰し、ますます衰退の危機に追い込むだろう。「小さくても輝く自治体（大きくても輝けない自治体もあるだろうが）」は「小さいからこそ輝き続ける自治体」として再生できるのか。栄村に見た「住民自治の精神」は、これからが真価を問われる。

今回の研修を振り返り、改めて、村長の感慨深い講演や、人間味あふれる生き方に接し、「再び、栄村を訪れてみたい」という思いが込み上げてきた。今春勇退される高橋彦芳村長に、心から敬意を表します。

ふきのとう 芽吹きはじめし 別れかな

＜参考文献＞
・高橋彦芳「田舎村長人生記 ― 栄村の四季とともに」本の泉社。
・「栄村の戦後史研究」長野県地方自治研究センター資料。

（うえくぼ　ひろゆき・笠置町職員組合執行委員長）